

江渡狄嶺さん 【中編】愛知大学教授・岩崎正弥さんに聞く(狄嶺会メンバー)

桐野夏生さんの小説で「テキレイスト」と紹介された狄嶺の魅力を探る

愛知大学教授・岩崎正弥さん (狄嶺会メンバー)



岩崎正弥さん

江渡狄嶺没後も、その遺業を継ぐべく有志による狄嶺についての研究が続いた(※1)。1968(昭和43)年、資料整理と雑誌「江渡狄嶺研究」(※2)の発行を担うため、正式に「狄嶺会」が発足。直弟子をはじめ、哲学者、農学者、宗教学者、在野の歴史家など、さまざまな立場で狄嶺を研究する人々が参加した。2001(平成13)年に7人の研究者による共著『現代に生きる江渡狄嶺の思想』を出版。その後も2007(平成19)年頃まで、高井戸の「狄嶺文庫」で例会が開催されていたという。メンバーの中で最も若い愛知大学教授・岩崎正弥さんに、現代に伝えたい狄嶺の魅力を教えてほしいとお願いしたところ、快くインタビューに応じてくれた。

岩崎さんが、最初に高井戸の狄嶺文庫を訪れたのは、京都大学大学院で農業思想史を研究していた1992(平成4)年のこと。狄嶺の孫にあたる江渡成幸さんの案内で、資料を見せてもらったという。その後狄嶺会に加わり、前掲の共著で狄嶺の地域論について執筆。2010(平成22)年には自著『場の教育—「土地に根ざす学び」の水脈』(※3)を出版し、その中で狄嶺の教育論を紹介している。

※記事内、故人は敬称略

※1：狄嶺の没後まもなく下中弥三郎らが発起人となって「農乗狄嶺会」が発足した。

1958(昭和33)年には、狄嶺が晩年に追究した「場」の理論をまとめた『場の研究』(山川時郎編)が出版された

※2『江渡狄嶺研究』：1959(昭和34)年、有志により発行を開始した同人雑誌。狄嶺の残した資料を再録し、研究論考を掲載した。第13号から狄嶺会が発行を引き継ぎ、1995(平成7)年に第28号が刊行されるまで続いた

※3 高野孝子さん(野外・環境教育活動家、早稲田大学客員准教授)との共著大臣、商工大臣を歴任する

同時代の帰農者の中で、最も農業の現場に近かった狄嶺

岩崎さんが江渡狄嶺に興味を抱いたのは、石川三四郎(※4)の研究がきっかけだった。彼の交友関係をたどるうち、狄嶺に行きついたという。

「1910～20年代の日本は、トルストイの思想に影響を受けた知識人たちが、次々と帰農した時代でした。石川三四郎もその一人で、1927(昭和2)年に東京郊外で帰農しています。彼の周辺には帰農した知識人がたくさんいましたが、一口に帰農と言っても、その内実はさまざまです。例えば、徳富蘆花(とくとみろか)は洋服を着て肥え桶をかにつぐというような美的百姓でした。人によって持続度もいろいろで、実際には2、3年で離農する人も多かったのです。そんな中で、一番農業に関わり、そこから哲学思想をくみ上げようとしたのが狄嶺だったのではないかと思います。」

岩崎さんは、これら帰農した人々を「帰農農本主義者」と呼んで研究した。「ある人の思想を研究する際、“言説と態度の複合”で見るという視点があります。言説はいいことを言っても実践が伴っていないと、その人の思想の深みはわからないという考え方です。それで言うと、狄嶺は“生活と言葉を一致させる”ことを目指して、実践に努めた人だったと言ってよいでしょう。ただ狄嶺は非常にお酒が好きで、帰農後も特に後年は思想活動が中心だったことから、実際に農作業をしていたのは、妻のミキさんと三蔦苑のメンバーの小

平英男さん、それから弟子たちだったという話もあります。しかし狄嶺が、農業を営んでいた“場”にいたことは事実ですし、身近に見る実践を通して、そこから思想をくみ取ろうとしたことは間違いのないでしょう。」

※4 石川三四郎：1876-1956。社会運動家。1903(明治36)年に幸徳秋水らの「平民社」に合流。無政府主義者として活動した



『場の教育—「土地に根ざす学び」の水脈』。岩崎さんは、本書で狄嶺を紹介

「半農半X(エックス)」というライフスタイルの先駆者

現在、岩崎さんは農業思想の研究をバックボーンとしながら、農山村の地域振興の課題に取り組んでいる。学生と一緒に中山間地域に入り、そこでUターン、Iターンの帰農者と出会うことも多い。

「狄嶺の時代も帰農ブームでしたが、現在も都市から地方に移って農業のある生活を選ぶというライフスタイルが一つの流れとなっています。例えば、京都の綾部市で農業をしている塩見直紀さんという方が提唱している“半農半X(エックス)”。これは半分は農業を実践しながら、半分はアート活動や執筆、レストラン経営など、自分の好きなことで自己実現するというライフスタイルです。今、移住者が多い農山村に調査に行くと、こうした人が多いと感じます。」中には高学歴の人が都会での仕事をやめて、百姓暮らしをするケースも多いという。

「狄嶺の生き方を実践面から見たとき、この“半農半X”の先駆者だったと言えるのではないのでしょうか。狄嶺は帰農して非常に苦労しましたが、現代の移住者にもさまざまな悩みがあり、時代は違っても抱える課題の共通点は多いと考えています。狄嶺がどういう人

江渡狄嶺さん【中編】愛知大学教授・岩崎正弥さんに聞く(狄嶺会メンバー)

物だったのかを彼の思想からアプローチすると非常に難解で、彼の「農乗曼荼羅(のうじょうまんだら)」に書かれているものを見ても全然わからない。でも経済至上主義の社会の中で農業に価値を見出して、新しい生き方を選んだ先駆者だったと考えると、現代的にも魅力ある人物だと思います。」



2008(平成20)年、京都府綾部市にある綾部市里山交流研修センターを視察する岩崎さん(写真提供：岩崎正弥さん)

現代の地域づくりと、
狄嶺の「場」思想の共通点

岩崎さんは、狄嶺の思想のどこに引かれたのだろうか。「私が特に魅力を感じるのは、彼が後半生に追究した“場”の考え方です。今、私は大学で地域振興の研究をしていて、人々が幸せになる地域づくりって何だろうかと日々考えています。いわば地域という“場”づくりですね。」

岩崎さんによると、狄嶺は“場”を、「くざられない、包み込む、広がる」というような柔軟な多様性を持つ空間として表現しており、これは現代の地域づくりを考えていく上でも大切な視点だという。「例えば、徳島県神山町はITによる町おこしと古民家を改装したサテライトオフィスの開設で移住者を呼び、成功事例としてマスコミでも取り上げられている地域です。そこで大事にしているのは、移住者のやりたいことを受け入れて応援するというスタンス。地域の持つ寛容な雰囲気が居心地の良さを作りだし、人が来やすくなっているんですね。」

また、狄嶺は人がさまざまな活動をすることで、その場が良くなったり悪くなったりすると

考えた。「学生と一緒に各地にフィールドワークに行くと、同じような産業構造の農山村でも地域によって雰囲気が全然違うんですね。やはり地域という空間には履歴があって、そこに関わった人々の活動の結果が現在の状態を作り出しているんだな、と実感します。狄嶺は三蔦苑という農場を通して、具体的な“場”づくりを実践しましたが、人々の活動の積み重ねを重視するという方法論は、現代の地域づくりにも共通する大事な視点です。」



杉並区立郷土博物館に寄贈された狄嶺関連資料について、担当学芸員の説明を聞く岩崎さん(同博物館内にて)

桐野夏生さんの小説
『ポリティコン』



桐野夏生さんの小説『ポリティコン』(文春文庫)

取材の際に、岩崎さんから「桐野夏生さん(※5)が、小説『ポリティコン』の中で狄嶺を紹介している」と伺った。

『ポリティコン』は、大正時代、東北の寒村に芸術家たちがつくったユートピア「唯腕(いわん)村」が80年後の現代まで運営されているという設定で、現代の農業、農村が抱える問題を鋭く解き明かした作品だ。作中では、登場人物が語る形で、狄嶺のことを次のように紹介している。「著書にはこう書いてあった。昔は、自分もトルストイ・マニアだった、

と。でも、今は違う、当時はあまりトルストイという人をよく知らなかったのだったね。知った今は違う、ということだろう。農業をやっていたから、地に足が着いている。強い自我と、実践に裏打ちされた自信がある。言うなれば、テキレリストとでも言えればいいだろうか。思想の独自性が強いんだろうね。」農業実践にこだわり、独創的な主張を持つ狄嶺自身と弟子たちを「テキレリスト」と表現しているのではないかと思われる。

狄嶺は自著『或る百姓の家』の中で、「自分が播きつつある種子は100年後に初めて花が咲き実を結ぶだろう」と展望していた。狄嶺が1913(大正2)年に高井戸の土を耕し始めた時から100年を過ぎた今、多くの人に狄嶺の魅力を知ってほしい。

※5 桐野夏生さん：小説家。1999(平成11)年、『柔らかな頬』で直木賞受賞。『ポリティコン』は、2007(平成19)年～2010(平成22)年の4年間、雑誌「週刊文春」と「別冊文藝春秋」に連載された長編小説

岩崎正弥さんプロフィール

1961年生まれ。京都大学大学院農学研究所農林経済学専攻博士課程修了(農学博士)。愛知大学地域政策学部教授。研究テーマは農本思想研究、地域づくり論。近年は中山間過疎地域の農山村を中心に学生とフィールドワークを行うなど持続可能な地域振興の課題に取り組む。

DATA

取材：内藤じゅん
撮影：内藤じゅん
写真提供：岩崎正弥さん
掲載日：2017年2月13日
出典・参考文献は【前編】に掲載

江渡狄嶺さん 【後編】狄嶺と交流した著名人

高井戸・三蔦苑を訪れた著名人との交遊録

一流の人物と幅広く交流



野良着姿の狄嶺。1939(昭和14)年、三蔦苑にて撮影(出典:『江渡狄嶺選集・下』、資料提供:江渡雪子さん)

江渡狄嶺は、同時代の著名人たちと幅広く交流していた。江渡家に残された資料や文献を読むと、学者や文筆家などの知識人から政治家、芸術家、宗教家まで、各分野で一流の人々が、狄嶺を慕って続々と高井戸の農場「三蔦苑」を訪れていた事実に驚かされる(※1)。

これほど多くの人々を引き付けた狄嶺の魅力とは、何だったのか。例えば狄嶺の友人で、大正期を代表するジャーナリストの長谷川如是閑(はせがわによぜかん、1875-1969)は、狄嶺の弟子が編纂した『場の研究』の序文で、狄嶺の風貌を「狄嶺とは、いが栗あたままで、無精髭(ひげ)を生やして、(しまいにそれは胡麻塩の頬髭になった)百姓のふだん着のような装をして、腰にタオルをぶら下げて、東北弁でものをいって」と紹介している。さらに人柄については、「よく人を訪ねて、相手によって、哲学、文学、宗教、芸術、法律、政治、道徳、風俗等々、人間社会のあらゆる方面に亘って、豊富に語るができるくせに、そのような顔もしないで、人のいうことをノートに書きとめている人で、しかし志ある人たちを集めて、だれのことばでもない、純粹に自分のことばを語っている人である。」(※2)と述べている。これを読むと狄嶺の独特な風貌が目につかぶとともに、人々を引き付けた人柄やマルチな資質がよくわかる。

※注釈は記事最後に記載

高村光太郎ら、三蔦苑を訪れた芸術家たち

狄嶺が芸術家たちと交流を深めたのは、1916(大正5)年頃からである。この頃、狄嶺は作家の水野葉舟(みずのようしゅう、1883-1947)と知り合う。そして、葉舟と親交のあった高村光太郎(詩人・彫刻家、1883-1956)や、柳敬助(洋画家、1881-1923)、高田博厚(たかたひろあつ、彫刻家、1900-1987)らも三蔦苑を足しげく訪れるようになった。葉舟は、狄嶺と同様に自分の娘を学校に通わせず家庭で教育していたため、光太郎が葉舟の娘・實子(みつこ)と狄嶺の娘・不二に絵を教えるなど家族ぐるみの交際をしていた。なお、書道は中村不折(なかむらふせつ、書家・洋画家、1866-1943)が教えていたという。他に、津田青楓(つだせいふう、画家、1880-1978)、富本憲吉(とみもとけんきち、陶芸家、1886-1963)が三蔦苑を訪れている。

高村光太郎

狄嶺と光太郎が、高井戸で親しく交流していた事実は、これまで全くとっていいほど知られていなかった。だが、1921(大正10)年には、三蔦苑の敷地内に光太郎が設計した「可愛御堂(かわいみどう)」が建てられ、1959(昭和34)年の伊勢湾台風で壊れるまで存在していたことがわかった。また、1924(大正13)年頃、高村家で食べていた「たくあん漬け」は全て三蔦苑で作っていたという。江渡家と光太郎の親交は長く続き、1944(昭和19)年に狄嶺が急逝したときに光太郎から狄嶺の二男・復(ふく)にあてた弔意を示す手紙が今でも保管されている。「殊に小生肖像作成のお約束も未だ果たさぬうちの事とて悲痛極まりなき思がいた志ます」(原文ママ)という文面からは、二人の深い友情がうかがえる。1960(昭和35)年、江渡家は、戦時中に預かっていた光太郎の彫刻作品「老人の首」を東京国立博物館へ寄贈した(※3)。

なお光太郎に師事した高田博厚が狄嶺をモデルに制作した「或る百姓の顔」という作品の写真が、狄嶺の著書『或る百姓の家』に口

絵として掲載されている。

※注釈は記事最後に記載



高村光太郎が設計した可愛御堂



狄嶺が急逝したとき、高村光太郎から届いた弔意を示す手紙(資料提供:江渡雪子さん)



顔の姓百る或
作家加博厚高
(ノボイイイ・聖書石中自製)

高田博厚が狄嶺をモデルに制作した「或る百姓の顔」(出典:『或る百姓の家』、資料提供:江渡雪子さん)

江渡狄嶺さん【後編】狄嶺と交流した著名人

中里介山、山村暮鳥ら文学者たちとの交流

文学者たちとの交流の記録も、多数残されている。狄嶺が帰農したときに世話になった徳富蘆花(とくとみろか、小説家、1868-1927)、大正期に高井戸に住んでいた尾崎喜八(おざききはち、詩人、1892-1974)、ダンテの文語訳で知られる山川丙三郎(やまかわへいざぶろう、イタリア文学者、1876-1947)、日本にペルシャの古詩「ルバイヤート」を紹介した堀井梁歩(ほりいりょうほ、1887-1938)らと親交があった。また、同時代のトルストイ信奉者として知られる武者小路実篤(むしゃのこうじさねあつ、1885-1976)とは、立場の違いを踏まえて一定の交流があった。

中里介山

長編時代小説『大菩薩峠』で知られる小説家の中里介山(なかざとかいざん、1885-1944)は、狄嶺の特に親しい友人だった。、狄嶺は牛欄寮(ぎゅうらんりょう)を開設する際に介山に資金援助を頼み、快諾を得ている(※4)。1915(大正4)年に介山が初めて三蔦苑を訪ねた時の様子を書いた「江渡さんへ」というタイトルの訪問記を読むと、「江渡さん、あなたの農場はすべて私の気に入りました」(原文ママ)と言い切り、狄嶺の人柄にほれ込む様子がざっくばらんに書かれている。以来、二人は生涯にわたって変わらぬ交遊を続けた。江渡家の狄嶺文庫には、介山が狄嶺に宛てた2通のはがきが残されている。



中里介山が狄嶺に宛てた2通のはがき(資料提供：江渡雪子さん)

山村暮鳥

狄嶺は詩人の山村暮鳥(やまむらぼちょう、1884-1924)とも交流があった。暮鳥といえは詩集『雲』(※5)が有名だが、この詩集を書いたのと同じ時期、狄嶺の著書『土と心とを耕しつつ』に、長編詩『燦爛(さんらん)たるもの』を寄稿している。暮鳥は詩に添えて「江渡さんの所願もまた、かうであらうと自分はおもふ」と前置きしつつ、頭上にまたたく無数の星に黄金の穀粒をイメージしながら「ひとびとよ/自分達は農夫として/ただ蒔きさえすればよいのではないか」「ただまけ/星のような種子である/そしてそれをまくところは/かうして天空のやうなうつくしい豊饒(ゆたか)な大地の上である」とうたっている。「ただまく」と繰り返す表現に、狄嶺の思想に対する暮鳥の理解を感じる詩だ。この詩が寄稿された後、狄嶺は病床にあった暮鳥を見舞っている。

※注釈は記事最後に記載



暮鳥が詩を寄稿した『土と心とを耕しつつ』。後に狄嶺は、暮鳥の詩集『雲』について「真に日本の土から生まれた詩」と評価している(資料提供：江渡雪子さん)

社会運動家たちとの接点

狄嶺は、学生時代に三宅雪嶺(みやけせつれい、1860-1945)が主宰する政治評論雑誌「日本人」に寄稿し、さかんに言論活動を行っていた。狄嶺自身は、社会主義思想とは一線を画していたが、同じく「日本人」に寄稿していた社会主義者や無政府主義者たちと交流があった。1908(明治41)年、散歩中に偶然幸徳秋水(こうとくしゅうすい、社会主義者、1871-1911)と出会い、秋水の自宅で議論を交わしたという狄嶺本人の記録が残っている。

また、千歳村船橋(現・世田谷区)で帰農した1911(明治44)年に、堺利彦(社会主義者、1871-1933)が設立した売文社の忘年会に参加。その夜、無政府主義者の石川三四郎(1876-1956)、渡辺政太郎(1873-1918)を自分の農場に招いてクリスマスを祝った。1917(大正6)年には同じく無政府主義者の大杉栄(1885-1923)、伊藤野枝(1895-1923)夫妻が三蔦苑を訪れている。女性運動家とも交流があり、山川菊栄(1890-1980)が三蔦苑のリポートを新聞に寄稿しているほか、山田わか(1879-1957)が牛欄寮で特別講義を行っている。

また、農村教育運動に参加していた大西伍一(※6)や下中弥三郎(平凡社の創業社長、1878-1961)など、農業関連の活動家とも交流があった。

※注釈は記事最後に記載



1911(明治44)年12月24日、売文社の忘年会にて、大杉栄、堺利彦、渡辺政太郎らとともに。後列右から2人目が狄嶺(写真提供：江渡雪子さん)

狄嶺が師と仰いだ禅の高僧と牧師

多くの人と交流していた狄嶺だが、師と仰いだのはいずれも高名な宗教者だった。大学在学中は臨済宗の高僧、渡辺南隠(わたなべなんいん、1834-1904)の下で参禅し、その後キリスト教思想家の新井奥遠(※7)に師事している。1907(明治40)年には牧師の吉田清太郎(1863-1950)と出会い、翌年、洗礼を受けた。吉田牧師は、キリスト教と禅の同一の境地を知ったとして「禅者牧師」と呼ばれた

江渡狄嶺さん 【後編】狄嶺と交流した著名人

人物で、その後、狄嶺は生涯を通じて吉田牧師を師と仰ぎ、家族全員が教えを受けた。吉田牧師の残した資料の多くは、狄嶺文庫に保管されている。なお狄嶺の没後、江渡家は老齢で体が不自由になった吉田牧師を引き取って世話をし、最期を見取った。

また、1923(大正12)年に曹洞宗(そうとうしゅう)の高僧、澤木興道(さわきこうどう、1880-1965)と知り合い、後半生は禅宗と農哲学を重ね合わせて思索を深めた。澤木老師は各地の禅道場を転々としながら、上京の折に三蔦苑を訪問していたが、1935(昭和10)年に駒澤大学の特任教授に就任してからは度々訪れるようになった。牛欄寮の特別講義で講師を務めたほか、狄嶺の没後も1955(昭和30)年頃まで三蔦苑で講話を続けた。江渡家には、現在も澤木老師の書いた短冊や書が多数残されている。なお、澤木老師の高弟で駒澤大学教授の酒井得元老師(1912-1996)は随行して三蔦苑を訪れた一人で、1978(昭和53)年、狄嶺文庫に銅銘版を設置した際に銘文を書いている。

※記事内、故人は敬称略



吉田清太郎牧師と狄嶺(出典：『地涌のすがた』、資料提供：江渡雪子さん)



澤木興道(左)と酒井得元。三蔦苑で撮影(写真提供：江渡雪子さん)



澤木興道が狄嶺に贈った、直筆入りの袈裟(けさ)

※1 1935(昭和10)年から1942(昭和17)年にかけて狄嶺が三蔦苑に開設していた私塾・牛欄寮の特別講義では、長谷川如是閑の他、狄嶺と交流のあった以下の知識人らが講師を務めている。安倍能成(哲学者・後の文部大臣、1883-1966)、浮田和民(政治学者、1859-1946)、木村謹治(ドイツ文学者、1889-1948)、暉峻義等(労働生理学者・労働科学の創設者、1889-1966)、三浦一雄(政治家・のちの農林大臣、1895-1963)、石黒忠篤(政治家・のちの農商務大臣、1884-1960)、森田重次郎(政治家、1890-1988)

※2 出典：『場の研究』序文「狄嶺の語る言葉」

※3 老人の首：1914(大正3)年の作品。東京国立博物館公式ホームページ上で画像が見られる

<http://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0032618>

※4 出典：「江渡狄嶺研究 第20号」

※5 『雲』：暮鳥の没後、1925(大正14)年に出版された詩集。「おうい雲よ」の一節で知られる「雲」や小学校教科書に掲載された「りんご」などの詩を収録

※6 大西伍一：1898-1992。兵庫県出身。民俗研究者。1926(昭和元)年から高井戸在住。狄嶺のほか、民俗学者の柳田国男や、昭和初期に農村教育運動と一緒に活動した平凡社社長の下中弥三郎らと親交があった。昭和40年代に狄嶺文庫の資料整理に尽力。杉並区の文化財調査協力員として数々の業績を残す

※7 新井奥邃(あらいおうすい)：1846-1922。教派に属さず、独自の境地で活

動したキリスト教思想家。高村光太郎や柳敬助にも影響を与えた

DATA

取材：内藤じゅん

撮影：写影堂、TFF

写真提供：江渡雪子さん

掲載日：2017年2月13日

出典・参考文献は【前編】に掲載

年表 1 明治・大正 誕生～高井戸「三蔦苑」設立～家族の形成

年(西暦・和暦)	年齢	できごと
1880 明治 13		11月、青森県三戸郡五戸町の呉服商の家に生まれる(本名・幸三郎)。
1898 明治 31	18	仙台の第二高等学校予科第一部に入学。 在学中に聖書を耽読し、トルストイに心酔。
1900 明治 33	20	同郷出身の青年学生たちと雑誌『北星』を創刊。
1901 明治 34	21	東京帝国大学(現・東京大学)法律学科に入学。(のちに政治学科に転科し、中退)。 小石川の白山道場に渡辺南隠を訪ね、座禅を始める。
1902 明治 35	22	三宅雪嶺主宰の雑誌『日本人』に寄稿。(以後、明治40年まで、同誌に29編の論文を寄稿)
1905 明治 38	25	関村ミキと学生結婚。 無政府主義者・クロポトキンの著書を読み、強い影響を受ける。
1907 明治 40	27	長女・不二が生まれる。 この頃、キリスト教思想家の新井奥邃を知り、その示唆もあり農場経営を志す。
1908 明治 41	28	散歩中に、社会主義者・幸徳秋水と出会う。吉田清太郎牧師より洗礼を受ける。
1909 明治 42	29	一時期、秋田県花輪町のミキの実家に住み、青森県から秋田県にまたがる原野に、集団農場(「太陽農場」)の構想を持つ。
1910 明治 43	30	父・庄兵衛が死去。 長男・十蔵が生まれる。 この頃、詩人・農民運動家の堀井梁歩を知る。
1911 明治 44	31	3月、東京府豊多摩郡千歳村船橋(現・世田谷区)に移住。徳富蘆花らの紹介で小作地を借り、妻・ミキ、親友の弟・小平英男とともに「百性(ひやくしょう)愛道場」を開き、帰農する。 12月、無政府主義者・石川三四郎、渡辺政太郎の訪問を受ける。
1913 大正 2	33	高井戸村字原(現・高井戸東)に移り、ミキ、小平英男とともに農場「三蔦苑(さんちょうえん)」の経営を開始。温床による花卉栽培、鶏卵販売を始める。
1914 大正 3	34	次男・復が生まれる。 学校教育を否定。長女・不二の就学を拒否し自宅教育を開始。
1915 大正 4	35	長男・十蔵が死去(享年6歳)。 この頃、中里介山を知る。
1916 大正 5	36	次女・従子が生まれる。 農業経営改善のため、豊島師範学校併設豊島農業補習学校(夜学)で農事講習を受ける。 この頃、水野葉舟、山村暮鳥、高村光太郎、高田博厚、柳敬助を知る。
1917 大正 6	37	大杉栄、伊藤野枝の訪問を受ける。
1918 大正 7	38	三男・定之進が生まれる。
1919 大正 8	39	子供たち4人を自宅教育。語学教育の方針を立てる。
1921 大正 10	41	敷地内に、高村光太郎の設計による「可愛御堂(かわいみどう)」を建立。献堂式を行う。下中弥三郎(後の平凡社・社長)らが発案者に名を連ねた。
1922 大正 11	42	『或る百姓の家』を出版。
1923 大正 12	43	関東大震災の時、朝鮮人学生・金三奎ら3人を自宅に保護する。 この頃、禅僧・沢木興道老師と知り合う。
1924 大正 13	44	『土と心とを耕しつつ』を出版。 友人・三浦辰次郎の招きにより渡米し、各地を農業視察。
1925 大正 14	45	安藤昌益を研究する。
1926 大正 15	46	物理学と数学との暗示から「場」の思想的構想を得る。

年表2 昭和・没後 思想体系の確立～没後の動き

年(西暦・和暦)	年齢	できごと
1927 昭和2	47	青森県内の有志と「民族自己の道建設社」を創設。 農民自治会の依頼で、長野県各地で講義(以後、晩年まで長野県を訪問し、講義を続ける)。 満州・大連の加藤襄の招きにより、朝鮮、満州を旅行。
1928 昭和3	48	自らの思想体系である「家稷農乗学(かしょくのうじょうがく)」の骨組みをほぼ固め、「農乗曼荼羅」を完成。大西伍一が主宰する「農村教育研究会」の顧問に就任。
1930 昭和5	50	長野県、青森県、秋田県、新潟県で講義。以後、各地に狄嶺を中心とする会ができ、講義に赴く。
1931 昭和6	51	孫・雪子が生まれる(長女・不二の娘)。 独自の教育論である「単校教育」を発想する。
1935 昭和10	55	自邸内に家塾「牛欄寮」を開設。1942(昭和17)年まで、多数の知識人が、特別講義を行う。
1939 昭和14	59	『地涌のすがた』を出版。 満州鉄道の招へいで、満州各地を講演旅行。
1944 昭和19	64	静岡県修善寺の裏山に小庵を借り「黒豆庵」と名付ける。 12月、黒豆庵滞在中に死去。
年(西暦・和暦)		できごと
1945 昭和20		狄嶺の遺業継承を目的とする「農乗狄嶺会」が発足。
1956 昭和31		参議院会館にて阿部能成らが「江渡狄嶺をしのぶ会」を開催。
1958 昭和33		『場の研究』(山川時郎・編)を出版。
1959 昭和34		有志による『江渡狄嶺研究』の刊行が始まる。
1960 昭和35		三蔦苑に伝わる高村光太郎作の彫刻「老人の首」を、東京国立博物館に寄贈。
1963 昭和38		敷地内に「狄嶺文庫」が建つ。
1967 昭和42		青森県立図書館で「江渡狄嶺回顧展」開催。
1968 昭和43		「農乗狄嶺会」を引き継ぎ、「狄嶺会」が発足。膨大な資料の整理、及び、第13号以降の『江渡狄嶺研究』発行を継承。
1970 昭和45		青森県八戸市立図書館で「江渡狄嶺展」開催。
1971 昭和46		妻・ミキが死去。『ミキの記録』(大西伍一・編)刊行。
1973 昭和48		『江渡狄嶺書誌』(大西伍一・編)刊行。 次男・復が死去。
1977 昭和52		狄嶺会五戸支部が発足(のちに七戸支部も発足)。
1978 昭和53		狄嶺生誕100年に向け、狄嶺文庫の入口に銅銘版を設置。
1979 昭和54		『江渡狄嶺選集(上下)』(家の光協会)出版。
1994 平成6		『江渡狄嶺一場の思想家』(和田耕作・著、甲陽書房)出版。
1995 平成7		『江渡狄嶺研究』第28号が刊行される。
2001 平成13		狄嶺会所属の研究者たちによる『現代に生きる江渡狄嶺の思想』(斎藤知正、中島常雄、木村博・編、農文協)出版。
2008 平成20		週刊文春に連載の小説『ポリティコン』(桐野夏生・著)で、作中人物が江渡狄嶺に言及。
2010 平成22		『場の教育―土地に根ざす学びの水脈』(岩崎正弥、高野孝子・著、農文協)出版。文中で、教育者としての狄嶺を紹介。

すぎなみ学倶楽部

<http://www.suginamigaku.org/>

杉並の歴史からラーメンまで